

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会
事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

平成11年度北海道博物館協会 ミュージアム・マネージメント研修会 — 概要報告 —

平成11年度北海道博物館協会ミュージアム・マネージメント研修会が、10月21日、22日にわたり、北海道大沼国際セミナーにおいて開催されました。「地域と博物館—まちに根ざし、まちから学ぶ—」をテーマにした今回の研修会は、全道から63名の参加者を迎え、二題の講演と質疑応答を行いました。以下に、講演の概要を報告します。

講演1 「地域に根ざした博物館活動」 — 地域の中の郷土資料館の役割 — ～みて・きて・ふれて・考える事業の展開～ 知内町郷土資料館学芸員 高橋 豊彦 氏

私の勤務地である知内町は、現在の人口は6,357人です。資料館が開館した昭和59年当時の人口は7,500人弱でした。ですから、開館当時からみると1,200人の町民がいなくなっているのです。また、児童生徒の数を平成4年度と11年度と比べても減っていることが明瞭にわかります。こういう状況を考慮しながら、観光地ではない町にある郷土資料館としては、町民を対象とした繰り返し来てもらえるような事業の展開をはかりながら、郷土資料館を運営していかなくてはなりません。リピーターがなければ入館者数は減ることはあっても現状維持でさえ難しく、苦勞するところです。

ところで、私が赴任した当時、現在以上に学芸員の仕事は理解されていませんでした。学芸員イコール発掘調査員というように思われていました。ですから埋蔵文化財の発掘のためではなく、郷土資料館の専門職員としての学芸員で採用される

のは、町村段階ではとても珍しかったのではないかと思います。

また、知内に赴任するときに、道教委のある人から、「知内町にとって郷土資料館が必要かそうでないのかは、3年が勝負だぞ」言われました。これはプレッシャーになりました。地域の現状を考えると、自転車操業的にいろいろな普及事業をおこなわなければ、郷土資料館や学芸員の役割なんて理解されないと切実に思われました。それで、特別展や企画展そしてミュージアム・コンサートなどのほか、教育活動として学校教育との連携とこのあとで説明する「ふれあい体験塾」などの普及事業を実施することになりました。

学校教育との連携（あるいは補完）として資料館や博物館のある市町村ではどこでもおこなっていることなのですが、小学校の社会科や生活科の授業に、移動資料館として土器や石器などの考古学資料を貸出したり、体験学習ということで農機具や石臼などを体験をさせたりしながら、時にはチームティーチング的な感じで授業にも参加しています。最近では、町内の小学校だけではなく、体験を取り組むことに意欲的な教師のいる近隣町の小学校からも利用されるようになってきました。

また、「ふれあい体験塾」という事業は、社会教育係がおこなっている事業との棲み分けという差別化をはかるために、関心のある人だけが参加すればよい事業という位置づけで、すなわち団体等に人数の割り当てなどをするような動員方法をとらないで、新聞折り込みと学校にたいするチラシだけでという個人を対象にした周知の方法で募集することにしたのです。もちろん社会教育係の協力があってできたのです。

最初の2年は、「ふれあい体験学習講座」と名づけて「星空観察会」や「土器作り」などの年4回か5回程度の講座で、開催のたびに参加者を募集して行いました。参加者は12、3名程度でした。3年目から「ふれあい体験塾」として、年度当

初に500円の参加料で小学4年生以上から一般成人までを対象に定員を20名にして応募しました。その時には、お金を払ってまで参加するだろうかとかベテランの社会教育の担当者からも心配されたりしましたので、定員に近い参加がありホッとした記憶があります。それが、学校の週休五日制に対応するという事で定員の枠をはずしたところ、年度によっては100名を越える参加者になる時代になりました。

ところで、郷土資料館で講座を開設するときには、モノを媒体とした教育ということ意識しています。また、実際の事業を開催するときには、結果よりも過程を大事にし、固定した結論を求めないということをスタッフや講師との総意として実施しています。

さらに、事業の参加者に接するときには、ひとつの目標への到達度に価値をおかないということと、時間にもそれほどこだわらないようにしています。そういうこともあってか、「ふれあい体験塾」に1年間参加したある小学生の校長から、「学校では失敗は数えられないが、郷土資料館の事業では失敗さえ教育になっている」というような言葉をいただいたこともあります。

こじつけかもしれませんが、今はやりの脳生理学にもとづく右脳左脳の話で言うと、学校教育が、論理的(言語的活動)な部分に重きをおく右脳強化型教育で、その両方を行うことにより、左脳と右脳のバランスのとれた成長をとげることができるのではないかと考えています。これからの時代、知識も必要ですが、その知識を生かすためにはイメージする力を鍛える必要があるのではないかと思います。郷土資料館では、モノを媒体とした教育によってそれが可能であると考えています。

郷土資料館が実施している「触れ合い体験塾」という事業は、「見て・聴いて・触れて・考える」をモットーに、参加者の思考力・批判能力・円熟した判断力が養われるような事業の展開をはかるという趣旨で開設しています。

また、講座の内容については、・参加者自身が楽しく参加することができ、・自然界のさまざまな事象を体験したと感ずることができ、・人間と自然の調和の取れたかわりあいが体験でき、・指導者や塾生相互で世代間の交流をはかれるとともに、・失われてゆく智恵と技術の伝承をはかれるような講座を20回ほど開設しています。

とにかくいろいろなことを味わって欲しいということです。今すぐに身にならなくても大人になったとき役立つかもしれません。少なくとも思い出として残って欲しいものです。ただ、難しいのは、大人というのは子ども時代のことは、普段は忘れてしまっていることが多いことです。

そのほか、お手伝いしてくれる方や指導者は、地域で生活している人の英知の活用ということで、なるべく地元の方をお願いしています。職業的にも、農業者、営林署の職員、会社員、会社役員、教師、僧侶、主婦、公務員など多士済々です。

さて、今後の資料館のあり方としては、自然・歴史・考古・民俗など、学問分野別研究成果を地域にあてはめるのではなく、地域のさまざまな課題を軸として、自然科学と人文・社会科学を統合して、郷土に新しい価値を発見する視点を保ちながら、それらを「ふれあい体験塾」などの郷土資料館事業をとおして郷土に還元することだと考えています。

講演2 「まちは博物館ということとは？」

板橋区立郷土資料館文化財専門員 齊川 昭二氏

これからの話は、マチを『人々が集まり住んでいるところ』という前提で進めていきます。

まず「まちは博物館」(以下「まち博」ということを簡単に言いますと、町全体を博物館として考えるということです。私達の住んでいる所には、様々な文化財などがあり、それらを見て廻るのに役に立つ、ガイドブックや、解説・案内板などがあります。そうしたものをとらえて「まち博」という風に考えています。こうした文化財とガイドブックなどとの関係は、コンピューターのハードとソフトとの関係と同じように、それだけでは役に立たず、それを操作するオペレーターの存在が必要になってくると思います。つまり、文化財といったハードとの部分と、ガイドブックなどのソフトの部分結びつける人の存在が大切になってくると思います。

次に町それ自体を博物館と考えるということに関して、例をいくつかあげてみたいと思います。

まず私の勤め先である東京都板橋区では、昭和57年に発足した文化行政懇談会が、文化行政のひとつとして『個性ある町づくり』ということをも答申しました。その中のひとつに『町は生きた博物館』という考えがありました。これは、板橋区を理解するためには町は全て「博物館」であるという視点が必要であり、区内にはそのための素材がたくさんある。そしてこれらをネットワーク化することで、町は「生きた博物館」として活用できるであろう、という考えです。

この「板橋区を理解するために」という目的は区民であるという自覚を持ち、自分の住んでいる場所はこういう所であると知ることではないかと思っています。そしてそのための手段として、『町は生きた博物館』という考え、「まち博」の考えが

出てきたのではないかと思います。

そのために区ではいくつかの事業を行いました。例えば郷土資料館の改築、区内施設の見学会、区内史跡散歩などがありました。そうした事業のひとつに、町を生きた博物館として活用する活動に協力をしてもらうための、ボランティアリーダーの養成講座（歴史・伝統文化、産業科学、自然科学コースの3つ）の開設というものがありません。

この目的は、習得した知識・体験等を地域において還元することでした。講座終了後歴史・伝統文化コースの修了生有志により、「まち博友の会」という会が結成されました。この会は博物館によくあるいわゆる「友の会」とはすこし性格が違います。つまり博物館の事業に関わる団体ということではなく、あくまでも前述したとおり、地域のボランティアリーダーという性格です。もっとも会の発足の経緯などの関係から、文化財係や郷土資料館の事業にも協力してもらっていました。しかし現在では独立団体として活動を続けています。

次に同じ東京の墨田区の事例です。墨田区という区は中小の町工場の集まっている所で、また職人もたくさん居るところです。この墨田区では、『小さな博物館運動』という事業を行っています。これは区の商工振興課が中心となり進めており、その目的は、区内の地場産業とそれに関する文化を区民と行政が一体となり推進振興し、産業と文化が潜在的に持っているはずの魅力を引き出し、元気づけようということです。

墨田区に限らず私達は、自分の身近に素晴らしい技術を持った人が居たり、素晴らしい産業がある、ということを知らなかつたり、気がつかないことがあります。墨田区ではそうしたことを一般に広く公開して、自分の区を知ってもらうひとつに役立てようという考えのもとにこうした運動を始めたそうです。

この運動は『モデルショップ運動 (Model Shop)』、『マイスター運動 (Meister)』、『小さな博物館運動 (Museum)』の3つの運動から成っていて、それぞれの運動の頭文字を取り、「3M運動」と呼ばれています。この中の『小さな博物館運動』ですが、これは区内にある産業製品や資料、文献などを所有している個人や企業に依頼し、それを公開して墨田区の「産業」と「文化」を区内外に広くPRするのに役立ててもらおうという運動です。これには今のところ開館予定のも含めて22の個人、企業が参加協力しています。その中には、業界ではトップクラスの企業もあれば、自分で店を構えている職人さんもいるなど、その形は様々です。

以上のように、板橋区にしても墨田区にしても、区内に元からあった何か一ヒトであれモノであれ

一をつなげて再認識し活用していこうとする点で、似ていると思います。

ところで私は、日本では身近な事象事物に対して、何かのきっかけがないと多くの人に対して関心を向けない、という傾向がある様に感じられます。それは無意識、無関心でいつづけるよりは、はるかによいことだとは思いますが、もっと自然に私達がそうしたことに目を向けることができればよいと思います。例えば私が訪れたヨーロッパのいくつかの都市では、旧市街と呼ばれる中世の雰囲気を残した市街と、近代的なビルが立ち並ぶ新市街とがありました。中には第二次大戦で壊滅的な打撃を受けたポーランドの首都ワルシャワなどは、戦後資料を集め元通りに復元したということです。またある町では、新市街、旧市街と言った感じはしませんでした。昔からある建物がそのまま残っており、現在でもオフィスなどとして使われていました。そしてその外壁には、その建物が昔は何に使われていたのかが書かれた説明板が張られてありました。こうしたように、そこに住んでいる人々が自分たちの住んでいる場所に対して持つ気持ち、考えというのは、日本とは少し違ったものであるような気がします。

さてこれまでいくつかの事例をあげながら、「まちは博物館ということ」とはどういうことなのか、また「まちは博物館にするには」どんなことが考えられるのかを私なりに述べてきました。最後にこの研修会のテーマである『まちに根ざし、まちから学ぶ』と関連付けてまとめにしてみたいと思います。

いろいろなまちに住んでいる私達が『まちに根ざし、まちから学ぶ』ためには何が必要でしょうか。まず自分の暮らしているまちから何を、何のために学ぶかということを考えてみる必要があります。それはつまり一人一人が考え、目的は異なりますが、その前段階の目標としては自分の住むまちを知る、ということになるのではないのでしょうか。

ところで始めに前提としてまちを『人々が集まり住んでいるところ』としました。そうするとまちには必ず人が住んでおり（住んでいた）、人が住んでいれば必ず何かをしている（いた）。その何か職人のような人それ自身であれ、人が造ったものであれ、その結果必ず何かがある、ということになると思います。そしてその何かを探ることがまちから学ぶことそのものであり、たくさんあるそれらが、子供から大人までの多くの人々の知的探求心、好奇心で結びつけられたとき、あるいは結びつけられる過程において、「まちは博物館である」と言えるのではないのでしょうか。

平成11年度学芸職員部会の活動から

企画からはほぼ3年目の平成11年7月に「北海道博物館ガイドブック」が刊行されました。

平成9年度北海道博物館協会の事業としての位置づけ、そして、学芸職員部会20周年を記念しての出版事業でした。多くの博物館の仲間たち、社会教育関係の方たちの手を経て完成したガイドブックです。早い時期に改訂版ができますよう、もっともっと普及させましょう。平成11年9月30日学芸職員研修会1日目終了後の交流会はガイドブック出版記念を兼ねて開催され、北海道博物館協会吉田和夫会長のご出席をいただき、出版の喜びを分かち合いました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。



ガイドブック出版記念パーティー

平成11年度学芸職員研修会は、平成11年9月30日から10月1日にかけて留萌市において開催しました。

研修テーマは『地域学のススメ — 北部日本海博物誌』で、『増毛町雄武・岩老地区に伝わる漁場の習俗について』（留萌市海のふるさと館特別学芸員高橋明雄さん）、『天売島における海鳥の保護について』（北海道海鳥センター研究員小野宏治さん）、『礼文島香深井5遺跡と稚内市泊岸1遺跡の調査』（稚内市教育委員会内山真澄さん）、『蝦夷地警備と秋田藩』（増毛町教育委員会学芸員小野卓也さん）、『地域史と博物館』（利尻町立

博物館西谷榮治さん）等々、それぞれ地味ながらも地域に根ざした調査、研究活動を続けておられる方々の事例報告をいただきました。それぞれの発表要旨については3月末発行学芸職員部会ニュースに留萌市海のふるさと館の高橋勝也さんが報告します。



平成11年度学芸職員研修会

研修会の開催にあわせて、学芸職員部会の総会が開かれました。今年度は役員改選時期にあたり、平成13年度までの2年間以下の役員構成で部会の運営に取り組むことになりました。

部会長：福士廣志（留萌市海のふるさと館）、副部会長：川辺百樹（上士幌町ひがし大雪博物館）・矢吹俊男（小川原脩記念美術館）、事務局長：園部真幸（江別市セラミックアートセンター）、幹事：長谷部一弘（市立函館博物館）・藤島一巳（江差町教育委員会）・舟山直治（北海道開拓記念館）・長谷山隆博（芦別市星の降る里百年記念館）・吉住晴美（滝川市美術自然史館）・鈴木邦輝（名寄市北国博物館）・西谷榮治（利尻町立博物館＝部会ニュース担当）・藤原康成（苫小牧市博物館）・米田秀喜（平取町立二風谷アイヌ文化博物館＝監査担当）・澤村寛（足寄動物化石博物館）・戸田恭司（釧路市立博物館）・増田泰（斜里町立知床博物館）・川上淳（根室市博物館開設準備室）

平成12年2月23日、役員会が江別市で開かれ協議の結果、平成12年度の学芸職員研修会は平成12年10月12日（木）～13日（金）の2日間、後志管内余市町で開催することになりました。

（学芸職員部会 矢吹俊男）

日本動物園水族館協会北海道ブロック 園館長会議報告

道内13の動物園並びに水族館で組織される社団法人日本動物園水族館協会北海道ブロックの園館長会議は、毎年2回開催されています。

平成11年度は次のとおりでしたので報告します。

◎平成11年度第1回園館長会議

●日 時 平成11年8月24日～25日

●会 場 帯広市十勝プラザ会議室

●参加者 18名（全園館出席）

●議題内容

1. 傷病鳥獣保護収容対策について
 - ・傷病鳥獣保護収容対策費として北海道から予算措置がされたこと
 - ・「第8次鳥獣保護事業計画の基準」の通知がなされた報告について
2. 北海道固有種の共同飼育について
 - ・エゾトミヨ・シマフクロウ・タンチョウヅル
3. 野生復帰事業の推進について
4. 今年度前期における各園館の入園者状況
5. 博物館法と各施設の関係について

◎平成11年度第2回園館長会議

●日 時 平成12年1月19日～20日

●会 場 札幌市円山動物園プラザ

●参加者 19名（1水族館欠席）

●議題内容

1. 各園館の平成11年度事業報告及び平成12年度事業計画（案）について
 - ・旭川動物園・釧路市動物園・室蘭水族館
 - ・おびひろ動物園・登別クマ牧場
 - ・ノシャップ寒流水族館・小樽水族館
 - ・千歳サケのふるさと館
 - ・登別マリパークニクス
 - ・サンピアザ水族館・円山動物園
 2. 平成11年度(社)日本動物園水族館協会中間理事会の報告について
 3. 傷病鳥獣保護収容対策について
 4. 平成13年度(社)日本動物園水族館協会北海道ブロック各種会議等の開催地について
 5. その他
 - ・J A Z G A ネットワーク事業活用の推進
 - ・動物の保護及び管理に関する法律の施行
 - ・北海道危険動物飼養規制条例の見直し
- (円山動物園管理課 下田宏之)

北海道青少年科学館 連絡協議会の活動について

本年度の総会と第1回館長会議を平成11年4月に岩見沢郷土科学館で開催しました。

事業報告、新年度の事業計画等を協議し、旭川市青少年科学館の本間秀夫さん（36年）室蘭市青少年科学館の江渡清さん（30年）ほか9名を永年勤続・功労者として表彰を行いました。

視察は岩見沢市自治体ネットワークセンターにおける先端情報の取り組みと、シベリアへ帰るまがんだの渡り鳥の最後の寄留地として有名な美唄の「宮島沼」の白鳥などを観察しました。

10月には、第35回職員研修会を旭川市青少年科学館で開催し、実技研修として、木工の街旭川にふさわしい「クラフト時計づくり」に挑戦しました。参加した職員は即席のビニールエプロンに身を包み、糸鋸盤の操作も手慣れたもので、市販のものにも劣らない作品を作り上げていました。

情報交換では本年度の事業取組状況を各館から発表したのち「学校と連携した教育普及事業」及び「特別展・企画展」の2テーマで発表後、質問や意見を交わしました。

引き続き、展示室やプラネタリウム、及び館内

に新設された「放送大学旭川サテライトスペース」の視聴覚機器や教材の見学を行いました。

視察研修は「旭川市博物館」の見学と、郊外に建つ白亜の「雪の美術館」を訪れ、参加者は美しい氷柱の回廊や展示品に見惚れていました。

11月初旬には第2回の館長会議を「滝川市子ども科学館」で開催し本年度の事業を終えました。（北海道青少年科学館連絡協議会 会長 高垣安昌）



職員研修会「クラフト時計づくり」

よみがえる慶長期の上ノ国

—アイヌと和人の中・近世世界を彷彿させる遺物続々と—

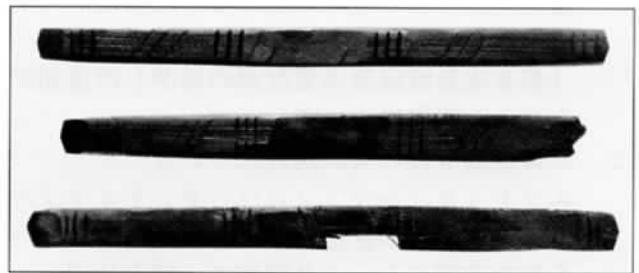
上ノ国町教育委員会では昭和54年以来、国指定史跡上之国勝山館跡の発掘調査を継続して行っています。これまでに7万点を越える遺物、約300棟の建物跡が発見され、空白と言われてきた北方中世史の一隅がおぼろげながら見えてきました。

本年度は、館直下の宮ノ沢川右岸地区、夷王山墳墓群第Ⅱ地区の調査を行いました。今回は紙楕の都合で前者の調査概要のみ報告します。

調査区南部では、勝山館期と推測される幅4m、深さ1.2mの堀跡をトレンチ調査という制約がありながらも、部分延長約22mを確認しました。これにより館直下平坦部の勝山館の外郭施設の一端が明らかとなりましたが、堀の形成期や延長等不明な点もあり、今後の調査・研究に託される課題も多くあります。調査区西部では、1640年降灰のKo-d下層に慶長(1596~1615)年間と推測される遺物包含層を検出しました。現在整理中であるため、出土点数・内訳の詳細は後日の報告となりますが、その種類を以下に列記すると、唐津、志

野、備前、越前、明染付等の陶磁器、樽、桶、箸、串、横槌、下駄、かんじき、羽子板、剣ないしは矛形を呈する形代等の木製品、「三むしろ」と墨書された木筒、鋏、釘等の鉄製品、香炉、筭、小柄、銭等の銅製品、アイヌ文化に由来するイクバスイ、丸木弓、シロシのある漆器椀、中柄等の骨角器等20点余が出土しました。他にも獣・魚骨の動物遺体、種子等の植物遺体も多数出土し、勝山館廃絶直後、近世初頭(慶長期)の上ノ国の生活振りを彷彿とさせます。特にアイヌ文化遺物の出土は、中世から近世へ移行する時代のアイヌ文化遺物の指標ともなりうるものといえ、不明な点が多い同時代の解明の一助となるでしょう。

(上ノ国町教育委員会 学芸員 松田輝哉)



16世紀末~17世紀初頭に位置付けられるイクバスイ

伊達市開拓記念館の展示換えと北黄金貝塚情報センター(仮称)の新設

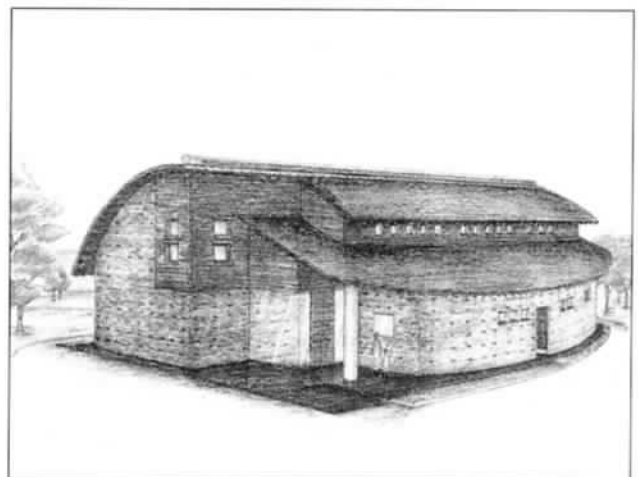
伊達市開拓記念館は、仙台藩亘理伊達家主従が明治3年に北海道開拓として移住した際に持ちこまれた伊達家の宝物や武具甲冑類、亘理伊達家文書などを多数所蔵しております。現在、当館では春・夏に武家文化財の、秋には埋蔵文化財の特別展を行っていますが、常設展示についてはしばらく手をつけていない状況でした。そこで新年度に展示換えを行うべく現在準備を進めております。

新たな展示換えの特徴としては可能な物に限りませんが、武具甲冑類の一部をケース外展示とするほか、法螺貝吹き等の体験ものを取り入れるなど、より身近な展示とすることを目指しています。

また、伊達市ではこれらの武家文化財と共に力を入れているものに埋蔵文化財があります。現在、縄文時代の遺跡である国指定史跡北黄金貝塚の整備事業を行っており、平成13年春のオープンを目指し、北黄金貝塚情報センター(仮称)を建設中です。センターでは北黄金貝塚の発掘調査で出土した遺物を用い、50年にわたる調査の成果や縄文文化の解明のために当遺跡が果たした役割、提起された問題等について解説する展示を行います。

目玉としては幅10m、奥行き1.5m、深さ1.8mの発掘調査区を屋内に再現するもので、壁面には貝層断面を貼付け、底面には人骨を伴う墓を3基復原し、あたかも発掘現場を覗き込んでいるような展示とします。併せて史跡公園を利用した各種体験学習メニューにより、縄文文化を体験するだけでなく、森や川、そこに住む生物等も含めて自然と人との関係を考えさせられるようなものにしたと考えています。

(伊達市教育委員会文化課文化財係 青野友哉)



北黄金貝塚情報センター(仮称)イメージ図

旭川市博物館企画展 「小泉秀雄展～大雪山の父～そして旭川～」

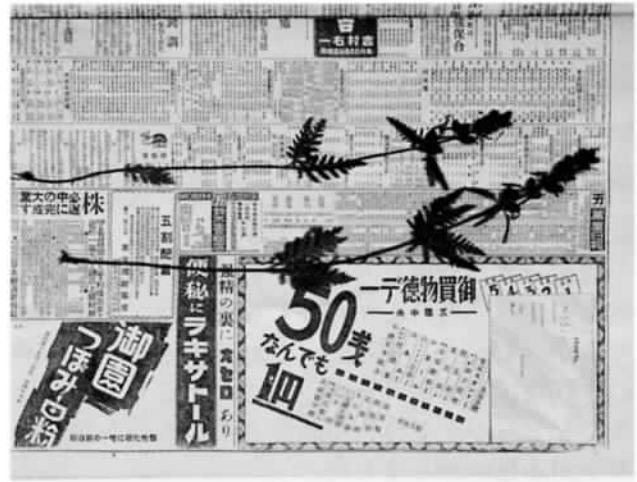
旭川市博物館の平成11年度企画展で標題の企画展を開催しました。開催初日は8月8日(日)だったのですが、この日の道新の日曜版の「異色人物伝⑥北へー」も小泉秀雄でしたのでこの記事を書き出す人もいますでしょう。

この小泉秀雄という人物は独学で教員免許を取るのですが、それは博物科で私立芝中学校の博物科の教師を経て旧制旭川中学校の植物の教師として旭川に赴任をします。そして、すぐに大雪山の調査を始め、旭川在任中に7回の大雪山登山をしています。

秀雄が旭川にいたのは明治44年(1911)6月から大正9年(1920)5月迄の9年間です。この9年間で、秀雄は大雪山はもとより、夕張岳、芦別岳、羊蹄山、駒ヶ岳など全道各地の山はもとより、利尻島や礼文島まで植物採集、学術調査をしています。旭川近郊の植物も丹念に調べており、タンポポについての分類調査には力を注いだようです。大正7年には「大雪山火山概論」、「北海道中央高

地の地学研究附図」を発表し、併せて大雪山模型も作成していますが、興味深いのは大雪山の山名が定着する礎になる本も秀雄が大正15年に「大雪山―登山法及び登山案内」として発行するのですが、この本と「北海道中央高地の地学的研究附図」との間では山名が大巾に違っていることです。何かしら謎めいたものを感じさせます。

(旭川市博物館 館長 鈴木絃一)



小林秀雄が大正初期に大雪山で採集した植物標本
(国立科学博物館所蔵)

網走管内博物館連絡協議会 平成11年度後期研修会報告(北見)

網走管内博物館連絡協議会の後期研修は、総括研修と位置づけ、毎年北網圏北見文化センター(北見市)が担当で開催しています。

今年度の研修は北網圏北見文化センターで開館15周年を記念して、北見市美術展実行委員会並びに北海道新聞北見支社などの主催により開催された「シャガールとエコール・ド・パリ～北海道立近代美術館所蔵による～」特別展にあわせ、地方ではなかなか見ることのできない優れた芸術作品



特別展「シャガールとエコール・ド・パリ」会場

の鑑賞とそれに関する講演をとおして、博物館職員の研修を深め、広く生涯学習における博物館機能の向上を図ることを目的に、11月6日、管内博物館関係者や多数の一般市民など51名の参加で開催されました。

まず特別展では、北海道立近代美術館が所蔵する世界的に有名なシャガール、パスキン、ユトリロ、キスリング、藤田嗣治など、二十世紀初めにパリに集まった「パリ派」とよばれる12人の作家の作品58点が展示され、シャガールの「パリの空に花」が特別展示されるなど、詩情あふれる絵画の数々を堪能しました。

また、道立近代美術館学芸第一課長の佐藤友哉氏による「シャガールとエコール・ド・パリ」と題して講演をいただき、「都会に生きる人々の人生の悲哀と、魂の輝きを豊かな詩情の中に、抒情あふれる個性的な作品を描き出した」エコール・ド・パリ(パリ派)の作品解説や時代背景を、スライドを交えながら話していただきました。

私たちににとっては、世界的に偉大な作家の作品を堪能する機会はなかなかなく、また各博物館でも美術展などの企画もふえている中、非常に意義深く充実した研修となりました。

(網走管内博物館連絡協議会 広報担当幹事
紋別市立郷土博物館 業務係長 佐藤和利)

開かれた博物館への試み —特別展「私の博物館」—

特別展「私の博物館」は、市民のみなさんがお持ちのコレクションや思い出の品を、学芸員とともに企画・展示しようという趣旨で、平成10年度から始まりました。これまでオートバイや世界の貝殻といった、当館では展示したことのない資料が、1階入り口の通称マンモスホールで来館者を迎え入れています。

昨年12月から1月にかけては、キャラメル空き箱という実にユニークな展示が行われました。現在50代後半の市内在住の方が少年時代に集めたシロモノです。数にして百五十点。明治・グリコ・森永・カバヤはもちろん、道内の古谷・池田・雪印、そして当時しか存在しなかったメーカーまでもが一堂に会しました。これらの資料1点1点、収集に関するデータ（いつ・どこで・どのようになど）が記され、博物館さながらの収集に頭の下がる思いがしました。

さまざまな資料を展示する一方で、その物に対する持ち主の思い出やエピソードを紹介して、

来館者に共感していただくことも、「私の博物館」では重要な目的です。資料を前にして、来館者同士が語り合う光景がよく見られるのも、この展示ならではのと言えます。また今回はミニ講座として、資料提供者の収集当時の遊びや世相を語っていただき、展示では不十分だった時代背景を紹介することができました。

「開かれた博物館」を合い言葉に、各地の博物館ではさまざまな事業が展開されています。当館における“自分の博物館づくり”が、この先どのように市民に受け入れられるか、非常に気になるところです。

（釧路市立博物館 学芸員 戸田恭司）



衝撃的な“なだれんじゃー”との出会い —全国科学館連携協議会科学館職員学習会に参加して—

「申し遅れましたが、私“なだれんじゃー”と言います。」そんな何気ないあいさつが、強烈な衝撃となって体を突き抜けていきました。平成12年1月18日から20日まで、茨城県つくば市を中心に開催された科学館職員学習会で、科学技術庁防災科学研究所で実験を体験したときのことで、全国から参加した35名の科学館関係職員はその素晴らしいサイエンスショーに魅了されました。

「なだれんじゃー」とは、なだれがどのような動きをしながら麓まで達するのかをシミュレートする実験装置（長さおよそ1.5mほどの立方体）です。ではなぜこの演示が衝撃的なほど魅力的だったのか。1点目は演示をされた納口さんの巧みな「話術」です。決して笑いだけで楽しませるだけでなく、「語り口」や「間」のとり方の上手さでどんどん演示に集中させていく技。2点目は「遊び心」があふれていること。「なだれんじゃー」とてもユニークな名前がつけられていますが、内容は大真面目な実験装置に“愛らしい”名前がつけられることにより「愛着」をもってしまふ。「愛着」を持てば「気になる」ようになり、

あれやこれやと触ったり実験してみたりする。そして実験装置に興味を持たせるところで「なだれんじゃー2号、3号」とだんだん大きさの小さい装置が登場し、最後にはポケットの中から「世界最小のなだれんじゃー」が登場する。これが3点目の魅力「ひとひねりの工夫」をいれることです。演示の仕方をひとひねりする。

しかしここで最も大切なことは、これらの装置もただ展示してあってもそれほど興味を持たれないということです。人が間に入って「面白さを伝える」ことにより、これらの実験装置は生きてくるのです。科学館は単なる展示施設ではなく、科学的な事象と子どもたちの間に、それをわかりやすく伝える人がいて初めて科学館は科学館になりえるのだと確信しました。そしてさらに大切なことは「教えてあげる」のではなく「考えさせる」ということ。実験を通じて「なぜなんだろう」と考えさせる。そのような「考える素材」を提供してあげることが、科学館・博物館にとって最も重要な役割なのだと実感しました。当たり前のことなのかも知れませんが、「なだれんじゃー」と出会いそのようなことを再確認した学習会でした。たきかわの「なだれんじゃー」をめざして、僕も頑張ろう。

（滝川市美術自然史館 半井 仁）

館 園 紹 介

浦幌町立博物館



教育文化センターの全景

1968（昭和43）年に建設され、翌年6月にオープンした浦幌町郷土博物館は、北海道百年と浦幌町開町70年を記念したものである。当時としては、やや遅れてオープンした上士幌町ひがし大雪博物館とともに十勝最初の博物館単独施設で、考古資料を中心とした展示内容はそれなりに評価を受けていた。また、1972（昭和47）年からは『浦幌町郷土博物館報告』を定期刊行するようになり、博物館活動の幅もやや広がりを見せ、道内外の館園とのつながりもできてきたところであった。

しかしながら、建設当初から言われていたように施設は極めて狭く、かつ次第に老朽化も進んできたことから、新館建設が狙上に上がるようになり、町の計画では総合スポーツセンターの次は図書館、その次が博物館と考えられるようになってきた。しかし、図書館の建設年次が当初計画より遅れると、博物館との複合施設化が言われるようになり、さらに教育委員会事務局が間借り状態であったため、三者複合化という案が浮上し、1998（平成10）年に着工、翌年10月完成、名称も公衆により浦幌町教育文化センター（愛称：らぼろ21）と決定した。

博物館は、教育文化センターの1階に常設展示室、2階に学芸員室、写真室、収蔵庫の単独スペースを保持し、ほかに視聴覚室、特別展示コーナー、物品庫、書庫、便所などの共通スペースがある。これらの各スペースは必ずしも広いものではないが、建設検討委員会の審議を経て、教育委員会が決定し、議会に提示したもので、それぞれの面積は次のとおりである。

常設展示室	378.56㎡
学芸員室	45.50㎡
資料整理室	78.40㎡
写真室	19.50㎡
収蔵庫	68.85㎡

常設展示室の展示内容も上記とほぼ同様の経過を経て審議されたが、細部については教育委員会に一任された。

展示の構成は、①自然からのメッセージ、②アオサギの世界、③十勝・浦幌の自然誌、④石器と土器の文化、⑤アイヌの暮らし、⑥十勝・浦幌のあゆみの6部構成で、構成の基本は「自然誌を少し取り込んだ歴史系博物館」という姿勢で、かつこれまで収集保管してきた資料、特に他地域に優勢な資料、あるいは十勝・浦幌を他と際立たせることのできる資料の展示を心がけた。これは、例えば「自然からのメッセージ」のコーナーでのウラホロイチゲ、「アオサギの世界」でのアオサギコロニーのジオラマ展示、比較的古くから調査の進んでいた考古資料の展示などである。

また、考古学関係の展示は縄文時代後北CⅠ式期の大型墳墓の床下復元展示を始めとして、時代を追って、あるいはテーマごとに展示する手法をとった。

なお、近世・近代の展示も行ったが、特に17世紀以降のトカチに視点をあて、いわゆる明治以降の近代史は、映像展示で補完した。

休館日：月曜日・祝日・年末年始

開館時間：10：00～17：00

（学芸員 後藤秀彦）



常設展示室

館・園の主な展覧会と普及事業

(2000年4月～2000年6月)

石狩

- 札幌芸術の森 (011-591-0090)
4.1～5.21「キース・ヘリング展」
5.27～7.16「20世紀・日本彫刻物語(仮)」
4.16～5.14「親子で遊ぶ 木とのふれあいワールド」
5.21～6.11「スペイン・日本陶6人展」
- 札幌市円山動物園 (011-621-1426)
4.29～5.7「春まつり」
- 北海道開拓記念館 (011-898-0456)
4.21～5.7 テーマ展「タイムトラベル北海道」
4.23 観察会「エゾアカガエルの歌声を聴こう」
5.26～8.13 特別展「恐竜とアンモナイトの世界」
5.28 特別展関連講演会「モンゴル恐竜大発掘」
6.11 講習会「縄文土器をつくる」
4.2～5.7 体験学習「50年前のこどもたち」など
- 北海道開拓の村 (011-898-2692)
5.3～5.6、6.25「ドン職人の実演」など
5.14、6.11「むらの自然観察会-野鳥-」など
6.24「むらの講演会 開拓と移住-鹿兒島県」
- 北海道立文学館 (011-511-7655)
4.29～7.2「挿絵と装幀の小宇宙」
5.20「文芸講演会」
- 北海道立近代美術館 (011-644-6881)
4.28～6.11「エミール・ガレ展」
- 北海道立三好太郎美術館 (011-644-8901)
4.1～6.4 所蔵品展「好太郎の札幌」

渡島

- 市立函館博物館五稜郭分館 (0138-51-2548)
6.1～9.17 特別展「五稜郭」
- 北海道立函館美術館 (0138-56-6311)
4.8～5.13「大観・玉堂から現代作家まで さくらに見る日本の美」
- 南茅部町教育委員会 (01372-2-5111)
4.28～11.12「大船C遺跡速報展示室」

後志

- 有島記念館 (0136-44-3245)
4.29～5.28「第2回ニセコ尻別川美術展」
6.17～7.7「第12回有島武郎青少年公募絵画展」

空知

- 滝川美術自然史館 (0125-23-0502)
6.9～27 巡回展「自然の花籠・日本の植物画展」
5.28、6.25「なるほど・ザ・サイエンス」
- 三笠市博物館 (01267-6-7545)
4.2～5.7 企画展「よみがえる太古の生命」
5月～「自然観察講座」

上川

- 旭川市青少年科学館 (0166-22-4171)
4.25～7.16「サインカーブ・数式のない数学」展

- 中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館 (0166-52-0033)
4.8～5.28「石心-せきしん-中井延也展」
- 名寄市北国博物館 (01654-3-2575)
4.7～23「大地讃々」
4.25～5.7「野外植物展」
5.22～28「マルメロ作品展」
6.6～18「木工・木彫 二人展」など
- 富良野市郷土館 (0167-22-3864)
5.14、6.18 観察会「花とバードウォッチング」など
5.28 体験学習「親子遺跡発掘体験学習」
- 北海道立旭川美術館 (0166-25-2577)
4.8～5.14「生の交響詩 難波田龍起展」
5.20～6.4「新ロマン派55周年記念 会員・会友展」
6.10～7.16「ニューヨークブルックリン美術館所蔵印象派展」

網走

- 上湧別町ふるさと館 J R Y (01586-2-3000)
5.1～31 企画展示「カナダ・北海道」

胆振

- 伊達市開拓記念館 (0142-23-2061)
4.28～5.21「伊達家所蔵の衣装展」
- 室蘭市民俗資料館 (0143-59-4922)
5.13 ふるさと講座「果箱づくり・採鳥会」
5.21「民俗資料館フェスティバル」
6月中旬 企画展「主婦の家財具展」

日高

- 沙流川歴史館 (01457-2-4085)
5.2～5.31 企画展「発掘調査成果展」

十勝

- おびひろ動物園 (0155-24-2437)
4.29～5.14 特別展「ポスター展」
5.28「春の探鳥ピクニック」
6.25「第23回裏側探検隊」
- 北海道立帯広美術館 (0155-22-6963)
4.11～6.14「美術館紀行 フランス美術名品展」
6.23～8.9「機械時代1920s-1930s グラフィック・デザインのモダニズム」
- 本別町歴史民俗資料館 (01562-2-2142)
6月 収蔵展「美里別川流送の記録」
6月 体験学習「本別沢の自然観察」

釧路

- 釧路市青少年科学館 (0154-41-6225)
4月～「日曜実験教室」「移動天文台」など

根室

- 標津サーモン科学館 (01538-2-1141)
4月下旬～6月 特別展「早春の根室原野」
5.3～5.5「サケ稚魚放流式」

事務局日誌 (平成11年10月21日～平成12月3月)

- 11月30日 第38回北海道博物館大会報告書刊行
- 12月17日 平成11年度道博協表彰部会
- 1月20日 北海道博物館協会会員証発行
- 3月24日 平成11年度第3回役員会(札幌市)